



足先部分と六文銭



漆の椀



発掘作業風景

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(14)0027号-2

小塚原刑場跡遺跡 発掘調査速報

パート I

南千住の回向院（南千住5—33—13）周辺は、江戸の刑場跡という場所柄、周辺で工事を行うと骨が出るといわれています。最近では平成10年10月30日、常磐新線工事に伴い、回向院前の道路下から頭蓋骨が1点発見されました。連絡を受け

け、現地へ向かうと井戸状の枠内から104点の頭蓋骨（出土時点では105点、後に修止）が出土しました。このときは工事の掘削深度が出土した深さに及ばないことから本調査には至らず、工事は慎重に進められることになりました。

平成13年、同じく常磐新線工事の中で小塚原刑場跡の範囲内でトンネル工事が行われることとなり、先行工事によって道路際より頭蓋骨が1点発見されました。

協議の結果、工事による掘削深度が遺跡にかかることから本調査となりました。工事日程の都合上2期に分かれ、第1期のB区（約32m²）は、平成14年2月16日から3月9日まで約1ヶ月半の期間で行われました。調査区内は極めてせまいスペースで、頭上には工事用の梁がめぐらされている状態でした。さらには、低地という立地上、水が常に湧き出てくる状況の中、人員増員でのスピードアップには限界がありましたが、半ば強行に調査は行われ、図面は頭蓋骨の出土位置を写真・記録するにどまりました。

第2期、A区（約130m²）の調査は、平成14年6月3日から9月2日に実施され、日本鉄道公社・JR東日本のご協力の下、人員、設備などを整えて調査が行わ

れました。調査の日程が厳しく、さらに季節柄（梅雨の時期）雨が予想されたため、工事の延長を避け、屋根を設置しての調査となりました。

土を掘れば骨にあたるような状態で、取り上げに時間を要した中、頭蓋骨だけでB区は約60点、A区に至っては、現在のところ200点強を超えます。また、四肢骨はA区で170点にのぼります。人骨の保存状態は、概に言えないのですが、平成10年時に井戸状の枠内から発見された時よりも脆く、中には崩れ落ちてしまうものもありました。

平成10年時は、粘土状の土が井戸状の枠に入つており、骨の中までぎっしり土が入り込んでいたことから、空気が遮断されパッキングした状態であったので、しっかりとした形で残っていたものと思われます。

小塚原での調査という作業は、水と粘りのある重い粘土質の土との闘いですが、一方で、人骨をはじめ木製品など有機物は、出土する場所が低地であることで比較的良い保存状況で残っているという良い面も持っています。

B区では個体（一人分）を把握することは出来ませんでしたが、A区では、少ないながらに埋葬状況（埋葬と呼べるかは現時点では不明）が確認できるものもありました。ただ、埋葬状況についても、埋葬施設はおろか、棺や早桶に納められていたわけではなく、土の上に（その体勢はさまざま）置かれているものがほとんどです。

出土した遺物は、人骨の他、骨では、馬・犬・猫などが見られます。その他、人骨にともなうと推定される遺物は、数珠や六文銭と思われる銭（寛永通寶）をはじめ、下駄・キセル、陶磁器片も出土しています。

出土した遺物の中には用途不明なものも多々含まれていますが、詳しい人骨の鑑定など、調査の結果については平成16年度刊行予定の報告書で明らかになっていくと思われます。

なお、小塚原の当時の様子などは4ページをご参照下さい。

地名のつぶやき

⑤南千住のアイデンティティ

〈場面 千住大橋の真中〉



『江戸名所図会』(荒川ふるさと文化館所蔵)

登場人物 *おしゃまな南千住 (114歳)

「迷子になりかけたものの気丈を装いながら」

あたし、「南千住」。明治 22 年（一八八九）生れの満 114 歳です。これまで「地名のつぶやき」に出てきた地名にくらべたら、まだホンの赤ちやんよ——パパ。私の兄弟が荒川（現隅田川）のあっち側にいるの。「北千住」というニックネームで呼ばれているんだけど、本名じやないのよね。エッ、あたしの地名はどうして付いたかっていうの？

— 良くぞ聞いてくれたという表情で —

あのね、千住という地名は、新井図書政次という人が嘉暦 2 年（一三二七）に荒川で拾った千手觀音様から付けたんですって。でもね本当は千葉さんが住んだから千葉住村と呼んで、後で千住村になつたんだという人もいて——子供のあたしでもこれは強引だなと思うんだけど——よくわからないよ。荒川の向こう側（北）だけの地名だったみたいよ。

江戸時代の初め頃の万治 3 年（一六五八）、向こう岸の足立郡「千住一丁目・同二丁目・同三丁目・同四丁目・同五

丁目、掃部宿・河原町・橋戸町さんたち「千住宿」と、あたしの親の豊島郡小塚原町・中村町が養子縁組しまし——ところで養子縁組つて何？——。あたしの家は 10 の町からなる大家族の「千住宿」です。この時、愛の掛け橋になつてくれたのが、文禄 3 年（一五九四）生れの千住大橋さんだつたんだつて。ロマンチックよね。

明治時代になつて間もなく、わたしの家は千住北組・千住中組・千住南組に分かれたの。「千住南組」というのがタマゴ時代の、あ·た·し。

— 急に深刻な顔になつて —

あたしたちの世界ではね。生れてすぐの 0 歳でも自分の思いとは関係なく縁組といふことがあるわけで、あたしなんかよりもキャリアのある橋場町在方分・三ノ輪村・下谷通新町・三河島村・千束町（以上 2 つはその一部）さんを養子として迎えたの。この地名たちは、生れたばかりのあたしの地名をオツムに載せて「南千住町！」を名乗ることになつたの。昭和 7 年（一九三二）には、みんなの地名が「南千住一丁目～十丁目」にかわつちやつた。あたしだつたら、耐えられないよ。自分がいなくなつちやうみたいで。

「あたしはどこから来たのだろう？ 消えて行つた地名の歴史をどう伝えていつたらいいんだろう」。つてここに来て、毎日自分探しをしてるの。

— 明るい顔になりぱんと手をたたいて —

そうだ、地名に昔の歴史を聞いて回ろう。自分のルーツを知るためにも。

— 橋の南側に小走りに走り去る —

専門員の日々③

展示の裏側

～エピソード②～

前号で、荒川ふるさと文化館の機能（郷土資料館としての機能「資料収集」「資料保存」「調査研究」「教育普及（展示）」と、文化財の保護・啓発の機能）を紹介し、例として館蔵資料展の企画書や、原稿の制作についてお話ししました。

では、実際の展示作業はどのようなものなのでしょうか。今現在、文化館の企画展示室は展示と展示の間の閉鎖時間が、通常 2 週間弱となっています。この期間に前の展示の撤収をし、次の展示の準備を行います。まず、前回の展示の撤収から見ていくましょう。

展示担当者が資料を展示ケースから片づけていきます。一つ一つ収蔵庫にしまいます。

もし、これが企画展示だった場合、美術品を専門に扱う部門を持つ運送会社に委託して、借用した資料の梱包をお願いすることもあります。資料がほぼ展示室からなくなつたところで、ケースや、スポットライトの電源をぬき、パネルを立てます。

この作業のあと、次の展示の準備です。

展示室のレイアウトに沿つて、どのような展示空間になるのかを担当者と打ち合わせをします。その打ち合わせに従つて、パネル、可動式のケース等を配置し、スポットライトやケースの電源も同時に確保します。この作業の時に車椅子が通行できるか、圧迫感が

ないか、展示の導線はこのまま良いのか等、確認をしていきます。資料がケースに入つてから、ケースを動かす訳にはいかないから、ケースを動かして何か事故があつた考するきつかけとなればということです。

展示すべてが終了し、展示ができた後に、調光をします。博物館などの施設では、非常紫外線カットの特殊なライトを使います。しかし、明るい強い光があたるのはやはり保存上望ましくありません。そのため、この作業が必要になるのです。この頃になると、大抵夜の 10 時はすぎています。時には、終電に間に合わないこともあります。

このように開催される展示は、館蔵資料展示であれ、企画展であれ、何かしらのメッセージを送つてます。どの展示にも共通していることは、来館者の方にあらかわを再考するきつかけとなればということです。

（加藤陽子）

これが終わると実際に資料を並べます。ただ、並べるというと簡単に思われるかもしれません、細心の注意が必要とされます。資料を保存継承していくのも資料館の役目ですから、なるべく資料に負担のかからないように展示をしなければなりません。例えば、冊子になつてある本を開いて展示をするときです。ある程度縛がついていて必要な頁を開いて置けば、その状態のまま展示できる資料ならいいのですが、中にはなかなか開いてくれない資料があります。そういうときに登場するのがケサンと呼ばれるガラスの棒です。博物館などで、巻物などを止めるのに使用されているあの透明な棒です。しかし、これで無理矢理とめて、癖をつけてしまうのも保存の観点からいふと問題があります。自作製のアソコ（緩衝剤）を作つたり、創意工夫が必要になります。

そうやって展示した資料に同時に展示資料の解説文（キャプションプレート）をつけます。館蔵資料展示の場合は、自分達の手作りになります。文字の大きさを確認しながら作つてきます。また、解説文パネルも拡大コピーをして作ります。作業すべてが終了し、展示ができた後に、調光をします。博物館などの施設では、非常紫外線カットの特殊なライトを使います。しかし、明るい強い光があたるのはやはり保存上望ましくありません。そのため、この作業が必要になるのです。この頃になると、大抵夜の 10 時はすぎています。時には、終電に間に合わないこともあります。

このように開催される展示は、館蔵資料展示であれ、企画展であれ、何かしらのメッセージを送つてます。どの展示にも共通していることは、来館者の方にあらかわを再考するきつかけとなればということです。

聖進勧の里暮…企画展こぼれ話…

去る平成15年2月から約一ヶ月間にわたって荒川ふるさと文化館では、企画展「ひぐらしのさと」江戸の名所と文人たち」を開催しました。江戸時代に江戸の名所として賑わいを見せた日暮里（＝ひぐらしのさと）をテーマに、浮世絵の展示のほか、「南總里見八犬伝」の作者で有名な滝沢馬琴や俳諧の小林一茶らをはじめとする江戸の代表的な文人たちが日暮里に残した石碑や文学碑などを取り上げ紹介しました。

企画展にむけて調査をするのですが、調べた事をすべて展示に生かすというのはいろいろな理由から非常に難しく、泣く泣く展示見送りとなつたネタもいくつか出てきています。これらはむろん今後も調査を続けていきますし、決して無駄なものではないのですが、ヒノキ舞台に立たせられなかつたネタたちへ筆者からのお詫びと供養の意味を込め、あるひとつの話を紹介したいと思ひます。それは、日暮里青雲寺と木食白道という人物との関係のお話です。

西日暮里三丁目にある青雲寺は、江戸時代に近隣の修性院や妙隆寺（現在、修性院と合併）とともに「花見寺」と呼ばれ、庭園の美しい寺として知られていきました。また、江戸で名高い谷中七福神のうち、恵比寿様が青雲寺には祀られていて、今でも毎年正月になると七福神めぐりの参詣客で賑わうのが存じの方も多いでしょう。

天保7年（一八三六）に刊行された『江戸名所図会』の「日暮里惣圖」に描

かれた青雲寺には、日暮里の丘陵西側の麓（現在の境内）から山上（現、西日暮里公園）にかけて境内が広がります。江戸時代に江戸の名所として賑わいを見せた日暮里（＝ひぐらしのさと）をテークマ、浮世絵の展示と書かれた諸堂が見えます。「ゑひす」「ゑひす」「ほてい」「観音」「こんひら」はすなわち恵比寿のことです。「こんひら」は青雲寺の鎮守であった金毘羅社です。現在、金毘羅社などの諸堂は残っていないが、文化7年（一八一〇）に建てられた「安井金毘羅大権現鎮座碑」という石碑が残り、荒川区の登録有形文化財となっています。この石碑の建立には、滝沢馬琴も関わっており、彼の随筆『吾仏乃記』にもこのことが書かれています。馬琴は他にも筆塚の碑を青雲寺に残しています。

この金毘羅社に関係する勧進帳が山梨県の個人のお宅に伝わっているそうです。^{※注1} 勧進とは社寺や仏像を建立・修繕するために金品を募ることです。この勧進帳は寛政6年（一七九四）に「聖觀世音菩薩本堂 鎮守金毘羅本社拝殿建立」のために作られ、勧進の趣旨文の後に「江戸日暮里青雲寺中願主木食白導」と署名があります。青雲寺の境内にあつた「觀音」と「こんひら」のお堂がこれにあたると思われます。勧進帳に書かれた趣旨によると、観音は西国巡礼の二十八番札所丹後國成相寺の尊像を写したもので、その本堂を再建するということ。鎮守金毘羅大権現はかつて太田道灌が勧請したものが、ご神体が無かつたので、先年京都安井御門室（京都市東山区）現在の安井神社）より金毘羅大権現の尊像を勧請し、そのため本社拝殿を建立す

つているのが、木食白導（道）という僧侶であることが分かります。木食とは米穀を断ち、木の実を食べて修行する僧のことをいいます。白道は宝暦4年（一七五四）甲斐国（山梨県）に生まれ、木食五行という人物と師弟関係になります。師である五行は日本各地を廻りながら多くの木彫仏を作り木食上人の名でも知られる僧で、彼の作った仏像は形式にとらわれない作風で、その表情から「微笑仏」といわれています。このように全国を遍歴して仏像を作り続けた著名な僧としては、他にも円空が思い浮かぶことでしょう。白道も諸国を廻り、多くの仏像を彫りましたが、特に恵比寿像と大黒天像が得意で、師と同じく微笑仏と呼ばれる愛らしい表情と独特で素朴な作風の仏像が山梨県や多摩地方に多く残されています。

先の勧進帳を見ると白道は寛政6年40歳の時に青雲寺に留まり諸堂建立を発願、勧進先は江戸市中と多摩地方で金銭や建築用材などの寄進を募っていました。白道は寄進者に対して建立成就のあかつきには家運長久・子孫繁榮・五穀成就を祈念したお札を差し出します。勧進帳に書かれた趣旨によると、お宅に残る白道使用の版本にも日暮里青雲寺の名が刻んであります。これらの資料から白道が青雲寺で勧進活動などを行つていたことが分かるのです。

さらに白道が恵比寿像を多く作つてること、多摩地方に白道の七福神の版画が現存していることから、青雲寺の恵比寿や七福神めぐりにも白道が大きく関わっていた可能性があるという推測がたつかもしません。青雲寺と白道との間には、より深い関連があつたように思いたくなっています。ただ肝心の青雲寺に白道に関連する資料が残っていないことや先に紹介した資料の実際調査や確認がとれなかつたため残念ながら今回の展示に生かすことができませんでした。

今後、未確認の資料の確認調査が進み、いつの日か皆さん前に披露できるようなかたちになることを祈りつつ、調査研究を続けていきたいと思います。

注 (1) 曽根原駿吉郎『木喰白道』
(木耳社 昭和50年)

参考文献 「特別展 多摩の微笑仏—木食白道」（福生市郷土資料室 平成13年）など

合掌

●資料を探しています
荒川区指定無形文化財（檜皮葺・柿葺・銅葺、平成10年度指定）保持者、島崎正成氏（85歳・東日暮里）は去る平成14年11月19日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

荒川ふるさと文化館では、千住製糸所と都電の展示を企画中です。これらに関するもの・情報がありまし

小塚原刑場跡遺跡 発掘調査速報

パートII

成候也。：

馬の骨の入った棺桶

以上、弥左衛門の目には、キリ
ら培われたものにほかなりません
結局、刑場とは何か

以上、弥左衛門の目には、キリストンが

”刑場を知らない“私たち

小塚原に刑場があつたことはよく知られており、読者の皆さんも何かしらイメージをお持ちかと思います。明和8年（一七七一）、杉田玄白が臍分けを実見し、「ターヘルアナトミア」の翻刻へと突き動かされた馬というエピソード、あるいは首切り地蔵吉田松陰や橋本左内が浮かぶかもしれませぬ。が、人骨はともかく、今回出土した馬や犬、猫の骨、あるいは下駄やキセルなどの遺物と矛盾はないでしようか。考えてみれば、今日の日本には存在しません。よつて私たちは、刑場なるものを経験的には知らないはずです。とすると、私たちは刑場のイメージをいつたいどこから仕入れてきただ知識によつて形作つてゐるのでしょうか。

一 榎本弥左衛門覚書 (東洋文庫 695)
平凡社、36頁

さて、当遺跡から馬の骨が入った棺櫛類が出土しています。これはいったい何なのか。嘉永4年（一八五二）6月、彈左衛門は、大名家の馬が死んだ場合どのようにしてきたかと町奉行所から尋ねられ、それに回答しています。そこでは「斃牛馬皮剥取」は家康以来認められている生業として、次のように続けます（以下、「弾左衛門関係史料集」1、541—542頁）。

そう考えると、刑場で命を絶ち切られる人びと、刑死者の側にも、固有の人生があつたに違いありません。玄白らが実見した、あの腑分けの遺骸にも、京都生まれの年の程50歳ばかりの老婦で、「青茶婆々」というあだ名の持ち主という話が伝わっています。もちろん彼女が献体を希望したわけではないことはいうまでもありません。

確かにイメージを持つためには、できるだけ確実な知識が不可欠です。そこで、実際に見聞した人の記録上の経験に目を向けてみるとしましょう。

刑場を担う人びとの存在

します。この頃、キリスト教は禁止されたばかりで、弥左衛門のみた光景はまさにみせしめでした。品川鈴ヶ森および小塚原は、当時、「刑場」ではなく、「御仕置」が執行される「場」＝「御仕置場」と呼ばれていました。つまり「御仕置」とは、死刑とともに惨たらしく晒すこと内容としま

さて、当遺跡から馬の骨が入った棺櫛類が出土しています。これはいったい何なのか。嘉永4年（一八五二）6月、彈左衛門は、大名家の馬が死んだ場合どのようにしてきたかと町奉行所から尋ねられ、それに回答しています。そこでは「斃牛馬皮剥取」は家康以来認められている生業として、次のように続けます（以下、「弾左衛門関係史料集」1、541—542頁）。

日本堤下江堀埋、御次々儀は、小塚原
御仕置場江堀埋候儀ニ御座候
江御沙汰有之、同様：其外諸家様方御
馬斃候節は、其最寄捨場江御取捨被成
候ニ付、手下非人共江申付皮為剥取：
このあと、大名家の馬まで埋葬すると
御府内の皮が減つてしまい、職分を果たせ
なくなるうえ、難渋してしまうから、今まで
でどおりとしてほしいと願い出てこの回答
は括られます。ともあれこれにより、将軍
とその世嗣、御三卿家の普段乗る馬が死んで
んだ場合、日本堤下へ、それ以外の馬の場

参考文献
平松義郎「近世刑事訴訟法の研究」(創文社、1960年)、
「江戸の牛」(東京都、1971年)塚田孝「近世日本
本身分制の研究」(部落問題研究所、1971年)、同

【身分論から歴史を考える】 桜倉家幹人「大江戸死体考」(平凡社)
【刑死者の行方】(当館紀要)3、
宏荒川区 小塚原刑場遺跡」(『
査・研究発表会発表要旨』28、2003年)

「身分論から歴史を考える」 桜蔵書房 2006年 氏
家幹人「大江戸死体考」(平凡社、1999年)・亀川
「刑死者の行方」(当館「紀要」3、2002年)・木山昭
宏「荒川区 小塚原刑場遺跡」(『東京都遺跡調
査・研究発表会発表要旨』28、2003年)

延宝8年（一六八〇）からまとめて始めた自伝「三子より之覚」を残しています。寛永20年（一六四三）、千住に差し掛かった彼は次のような光景を目にしていたといいます。

：此時せんじゆ海道ばたはつつけ場二、
御公儀よりきりシタソんを四、五人さかへ
まに御つるし、(通) 談左衛門に御番被仰付

思います。「御番」の「御番」とは、「番」が幕府に公儀に対する務めであります。されば、この役割として担つたものだつたことを示しています。彼らは社会のなかで、こうした行刑に関する雑務や、また斃牛馬の処理を担い、皮革原料の生産という社会的な役割を担つていました。

を照らし合わせると、将軍家以外の人びとに
とっては、「刑場」を「捨場」としていた可
能性は高く、動物の骨の存在をその観占
から理解することも可能かもしれません。
冒頭紹介した玄白らが実見した腑分け
を実際に執刀した人物は、「えたの虎松」
の祖父であると「蘭学事始」に記されてい
ます。この技術と知識は、こうした生業か

※本誌で使用した資料は、歴史資料であつて当時の政治やあり方を反映したものであり、差別語や差別表現が認められることがあるが、本誌はこれを肯定・容認するものではない。人権を尊重し差別を解消するためには事実認識が不可欠であるという立場から、区の当時の歴史文化を窺う上で必要であると考え、歴史的事象として引用した。

なお、漢字表現が現代において侮蔑的なニュアンスを持つ用語については、原則としてひら仮名とし、「一」をつけて表記した。